

エンカウンター（ENCOUNTER）

第 64 号

平成 19 年 8 月 20 日

編集・発行人 〒224-0015 横浜市都筑区牛久保西 2-14-28 山口周三

電話 045-912-1960

金田福一「日々の糧 365 日」より（3）

5 月 13 日

「主に感謝せよ。主はまことにいつくしみ深い。その恵みはとこしえまで。」（詩篇 107・1）

どんな現実をも、感謝をもって受け取っていくということは、座りこんで、自分で処理していくことのように誤解されがちです。しかし、キリスト者の現実には、服従と前進であるということを、忘れてはいけません。キリストに従って前進していくキリスト者の、その一呼吸、一呼吸が、「主よ、感謝します」「主よ、感謝します」という言葉となって、現わされるのです。ですから、キリスト者の感謝は、希望なきあきらめではなく、未知なる未来に立ち向かう、胸躍る感謝の思いであり、創造の神のみ手が、現実創造していくものに対する、期待に満ちた感謝なのです。主がこれから何をなさるか、そのみわざを見守るべきです。

5月16日

ただ、自分の敵を愛しなさい。彼らによくしてやり、返してもらうことを考えずに貸しなさい。（ルカ6・35）

敵を赦しましょう。自分に対して罪を犯した者や、心を傷つけた人も赦しましょう。それは神のみ心なのです。もしも、赦すならば、怒りも、争いもないでしょう。しかし、その赦しに、愛がないならば、神のみ心ではありません。この世には、愛のない許しもありますが、そこには、憎しみや、さげすみの心が、残っているはずで、憎悪や軽蔑は、愛によって消されなければなりません。「自分の敵を愛し、迫害する者のために祈れ」と主は言われました(マタイ5・44)。その倫理は、たとえ、少数者の倫理であったとしても、また、どんなに困難であったとしても、主の弟子たちは、それを実行するので、主の愛が、それをさせて下さるからです。

5月17日

「……あなたの神である主を愛せよ。」また「あなたの隣人をあなた自身のように愛せよ。」（ルカ10・17）

どんな場合にも、隣人を愛することに徹すべきです。人の過ちを指摘する強さを捨てて、自分の罪を詫びるべきです。しかしこれは、一般的な倫理ではなくて、キリストの弟子の心得です。これは、家庭でも、職場でも、事故などの際にも、適用されるべきです。世の人は、お詫びをしたり、相手に同情したりすることは損だと考えています。そうして、責めたら責められるという悪循環を、断ち切ることができないのです。けれど、おのれを守ることを捨て、自分の立場を捨てて、相手に同情する時に、相手が良心に目覚めるといふ奇跡がしばしば起こるのです。相手を愛さないことは主にゆだねないことです。主にゆだねる時、主がみわざを現わされます。

5月23日

しかし、この方を受け入れた人、すなわち、その名を信じた人々には、神の子どもとされる特権をお与えになった。

(ヨハネ1・12)

キリストを宿した神の子たちは、ふしぎな生活の技術を身につけてまいります。何事も思い煩わないで、一切を主にゆだね、現実の一瞬一瞬を、感謝して生きていきます。また、はずかしめられたことや、いじめられたことや、心を傷つけられたことなど、いやな思い出や、いやな言葉や、その人に対する憎しみを心の中に持ち続けないで、すぐに忘れてしまうのです。それは全く、驚くべき技術と言わなければなりません。それだけでなく、このように祝された忘却は、また、細やかな記憶力と組み合わせになっているのです。すなわち、わずかな好意や、愛や、親切をも、決して忘れはしないのです。

5月24日

あなたがたは、恵みのゆえに、信仰によって救われたのです。それは、自分自身から出たことではなく、神からの賜物です。(エペソ 2・8)

「イエスさまを信じるようになる」ということも、神さまからのお恵みです。イエスさまが与えて下さってこそ、信仰が、自分のものになるのです。礼拝を守るようになることも、聖書を読むようになることも、お祈りをするようになることも、人に親切になることも、まじめになることも、信仰によって与えられるキリストの恵みです。かつての律法的な努力の結果は、自分の罪を示されただけでした。罪を示し、傲慢を打ち砕くことが、律法の性質と目的なのです。今、十字架を負うて主に従い、神さまに喜んでいただける人生を生きられるとしたら、それはキリストによってもたらされた、恵みの賜物にすぎません。

5月29日

イエスは答えて言われた。「まことに、まことに、あなたに告げます。人は、新しく生れなければ、神の国を見ることはできません。」

(ヨハネ 3・3)

「あらゆる場合に、感謝をささげよ」(ピリピ4・6)「すべてのことについて、感謝しなさい」(1テサロニケ5・18)と、パウロは言いました。感謝できないこともあるではないか、という声もよく聞きます。イエスさまのそばに居ないならば、できないこともあるでしょう。しかし、感謝できないような、つらい事や、悲しい事にあつてこそ、主の慰め、主の愛が、感謝できるのです。感謝できないこともあるという言葉は、不信仰な自我の声にすぎません。イエスさまは、そのそばに居る者を、何事でも感謝する人に、変えなされるのです。それが、主のみ心であり、主のみわざであるのです。

6月1日

主イエスは、私たちの罪のために死に渡され、私たちが義と認められるために、よみがえられたからです。

(ローマ4・25)

福音とは、人間がすることを宣べ伝えることではありません。来て下さったキリストのみわざによる人間の変化、変化させてくださるキリストのみわざを、福音と言うのです。個人の信仰生活も、教会の伝道も、このキリストのみわざなのです。主がいつも、あなたのそばに、あなたと共に、居て下さると確信しなさい。そのときから、あなたは変えられます。あなたが、自分の力で、自分を変えていくではありません。主が、そのみわざによって、あなたを変えなされるのです。ただ、その御臨在を確信し、賛美するようにならないと、みわざが起こりません。自分でやっつけようとする間は、主の栄光は現れません。

6月7日

神は、罪を知らない方を、私たちの代わりに罪とされました。それは、私たちが、この方にあって、神の義となるためです。

(コリント 5.21)

自分の罪に気づかなければ、悔い改めることはできません。自分の罪に気づかなければ、十字架の愛は分りません。自分の罪に気づかなければ、福音を持つことはできません。自分の罪に気づかなければ、キリストを宿しまつることはできません。自分の罪に気づかなければ、他を尊敬することはできません。自分の罪に気づかなければ、赦しを乞うこともできません。謙遜とは、自分の罪に気づくことです。自分の前に、主イエスキリストがおられることに気づく時、自分の罪が分るのです。自分の罪に気づかせて下さるのは、聖霊のお働きです。自分の罪に気づいた、砕けた魂に、主は御内住なさるのです。

6月19日

このとおり、私は、あなたの戒めを慕っています。どうかあなたの義によって、私を生かしてください。(詩篇 119・40)

信じる者は生きます。どんなに悲しくとも生きます。恥ずかしくとも生きます。行き詰っても生きます。頭を下げてでも生きます。お詫びをしてでも生きます。誠意をもって生きます。お詫びをしてでも生きます。しかし、執着ではありません。現在の一瞬一瞬を、ゆだねてしまっているだけです。生きる責任を負い得ませんが、主のみ手の上で生かされているのです。信じる者は、一瞬一瞬の現実と未来を、主のみ手にお返ししてしまいました。時の流れは、主のみ手の上にあります。現在を悲しみ、未来におびえていた、あの私は死にました。キリストと共に、十字架の上で死んだのです。虫けらにすぎない私ですが、今は、主のみ手の上に、生かされている私なのです。

6月28日

私たちの主イエス・キリストの父なる神がほめたたえられますように。（エペソ1・3）

パウロは、獄中で書いた手紙でも、主をほめたたえました。どんなにつらいことや、悲しいことに会っても、神さまのなさることですから、決してケチをつけないで、賛美を失わないということは、救われた神の子たちの特徴です。神の子たちが、なぜ、苦しみや悲しみに出会うのでしょうか。それはたいてい彼らのためであるよりも、そういう出来事の中で、なお感謝と平安を失わないことによって、同じような人生経験をしている人たちを、慰めたり、励ましたりするためです。即ち、神の子たちの受ける苦難は、神から与えられた尊い使命であるということです。故に友よ、主にあって勇気を出しなさい。

7月2日

心に植えつけられたみことばを、すなおに受け入れなさい。みことばは、あなたのたましいを救うことができます。

（ヤコブ1・21）

言葉は、魂から出るので。魂が、救われていないならば、憎悪や、愚痴や、つぶやきや、神のみこころを痛める言葉が、口癖となって出てくるでしょう。言葉は、魂から出るだけでなく、みずからはきだす言葉を糧として、成長するのです。悪しき言葉を口癖にする魂は、いよいよ、滅び行く魂にと成長するでしょう。キリストを宿した魂は、み言を糧として成長いたします。主の臨在と、これにともなう感謝や、賛美を口癖にする魂は、いよいよ柔和な、寛容な、慈愛に満ちた魂にと成長し、その輝きを増していくでしょう。魂が救われるということは、根本的なことなのです。あなたは、どんな口癖を持っていますか。

7月7日

彼はこわれていた主の祭壇を建て直した。(列王 18・30)

そして、主の祭壇を築き、...その上に感謝のいけにえをささげた。

(歴代 33・16)

エリヤはバアルの預言者に打ち勝ちましたが、その前に、まず、主の祭壇を建て直しました。私たちにもまた、打ち方ねばならないバアルの預言者が、眼前に居ますが、まずなすべきことは、立ち向かうことではなく、主の祭壇を建て直すことです。友よ、あなたの祈りの祭壇はこわれてはいませんか。朝ごとに、まず主の前に出て、み言葉に耳を澄ましていますか。み言葉の恵みに打たれるまでは、敵に立ち向かってはいけません。また、あなたは選ばれた祭司として、教会や、家族や、友らの名を、主の前に申し上げて、とりなしと報告を行なっていますか。友よ、あなたの祈りの祭壇は、こわれたままではありませんか。

7月13日

そこで、イエスはみことばをもって霊どもを追い出し、また病気の人々をみなお直しになった。(マタイ 8・16)

聖書のことを、「神のみことば」と言います。人間に対する、神の語りかけであるからです。しかし、昔の書物ではありません。額に入れられた教訓でもありません。それは、今、選ばれた誰かに語りかけられる言葉なのです。しかも、語りかけられたその人を、そのみことばの通りに造り変えていく、神の創造の力なのです。「わたしのもとに来なさい」と聞いた人は、キリストのもとに来ます。「休ませてあげます」と聞いた人は、休みを与えられます。「心配するな」と聞いた人は、心配しない人にされます。「わたしについてきなさい」と聞いた人は、キリストについていく人生を、歩み始めるのです。

7月15日

罪過の中に死んでいたこの私たちをキリストとともに生かし、...
...あなたがたが救われたのは、ただ恵みによるのです。

(エペソ2・5)

キリストの救いにあずかるならば、人間が変えられます。変えられていない人の信仰は、自分の力でやっつけようとする信仰です。しかし、自力で、自分を変えることはできません。今生きておいでになるキリストが、人間を変えなされるのです。変えてくださるキリストに、いつもおまかせし、ゆだねることが、ほんとうの信仰なのです。その信仰は、自分で持とうとしてあせっても、持つことはできません。自分が変えられないことに気づいて、ひれ伏す時に、神さまは、キリストを信じる信仰を与えて下さり、そして、造り変えて下さるのです。

7月18日

主を呼び求めるすべての人に対して恵み深くあられるからです。

「主の御名を呼び求めるものは、誰でも救われる。」のです。(ローマ10・12,13)

「主の御名を呼び求めるものは、だれでも救われる」とあります。イエスさまは、どこにおられると、あなたはお思いですか。高い天にでしょうか。遠い彼方にでしょうか。いくら呼んでも来ては下さらないでしょうか。来られたかと思っても、すぐに去ってしまわれるでしょうか。いいえ、安心しなさい。イエスさまはそんなお方ではありません。あなたの所に来て下さいました。あなたのそばに居て下さいます。あなたは決して捨てられることはありません。あなたは、このことを、しっかりと確信しなさい。もう悲しそうに呼ばなくてもいいのです。イエスさまのそばに座って、聖書を開いて、み声を聞きなさい。

7月23日

あなたがたの思い煩いを、一切神にゆだねなさい。神があなたがたのことを心配してくださるからです。(ペテロ5・7)

「私についてきなさい」と言われる主は、私のすぐ前を進んでおられます。しかし、主はまた私のことを「心配して」下さいます。私に大変なことが起こったときは、ふり向いて、私をごらんになり、力づけて下さいます。主は、弱い私を見捨てて、前進なさるようなお方ではありません。ふり向いてくださるお方です。そして、私と対話するために、私の現実の「時」を私と一緒にすごして下さいます。弱さのために、病気のために、最後には死のために、お従いし得ない私たちですが、その時にこそ、永遠の主は、やさしき愛をもって、私たちとお語り下さるのです。従い得ない時も、共に居て下さるのです。

7月24日

彼女にマリヤという妹がいたが、主の足もとにすわって、みことばに聞き入っていた。(ルカ10・39)

マリヤは、みことばに聞き入っていました。たくさんの来客の接待も忘れて、みことばの注ぎの中にひたりきっていたのです。イエスさまはそのことを、「どうしても必要なことはわずかです。いや、一つだけです。マリヤはその良いほうを選んだ」と、評価されました。また、イエスさまは、「求める人たちに、聖霊を下さらないことはない」と言われました(ルカ11・13)。「みことばに聞き入る」と、
「聖霊を受ける」ことは同意義です。みことばには、あなたの人格を造り変え、言動を一新させる力があるのです。朝、早く起きて、みことばの下に身を低くして、耳をすまそうではありませんか。「主よ、みことばを下さい」

7月26日

あなたは、いろいろなことを心配して、気を使っています。しかし、どうしても必要なことはわずかです。いや、一つだけです。

(ルカ 10・41 - 42)

お客さんの接待にイライラしてきたマルタは、マリヤが手伝ってくれないことで頭に来て、イエスさまに文句を言いました。そのときマリヤは、「姉さん、バタバタしないで、なぜみ言を聞かないの。なぜ感謝しないの」と、言いませんでした。かえって、手伝っていない自分のことで、小さくなっていました。マルタが、仕事もしない妹にもやさしくし、バタバタと忙しくても、感謝に溢れてするようになるためには、まずみ言を聞き、み言によって変えられる時を、持つ必要があります。世の中には、忙しく働きながら、悪く言われる人も必要ですが、しかし、必要なことは、ただ一つ、み言だけです。

7月28日

するとすぐに、その子の父は叫んで言った。「信じます。不信仰な私をお助けください。」 (マルコ 9・24)

「主よ、感謝します」と、口癖にする生活によって、確信のない生活から脱出しようとしても、人間の努力では、長続きいたしません。主の臨在の確信は、努力によって得られるものではないのです。しかし、人間は、最後まで、「何をしたらいいのでしょうか」と、言ってやまないでしょう。まだ確信はもっていないし、努力ではないといわれるし、全く絶望して、居ても立っても居られなくなるでしょう。それでいいのです。主はその時を、待っておられるのです。確信と、解放と、自由とは、その絶望の谷間から始まるのです。「主よ、感謝します」と、泉は湧き溢れるでしょう。必ず、御霊が働いて下さるからです。